

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

## イカリソウ *Epimedium grandiflorum* Morr. var. *thunbergianum* Nakai (メギ科 Berberidaceae)

4月、木々が芽吹き、山々が緑に染まる頃、山歩きをすると淡い赤紫色で船の錨に似た花を付けた草本を見かけます。これがイカリソウです。本植物は主に本州の太平洋側から四国にかけての丘陵や山裾の雑木林などに自生する多年草で、高さ20～40cm、茎は数本そう生し、葉は紙質で裏面に毛があります。葉は長い柄をもち、3つに枝分かれした先に3枚の小葉のある1～3回三出複葉をつけ、小葉は側方と中央でやや形の異なる柄を持ち、卵状皮針形、辺縁には刺毛状の小さきよ歯があります。4～5月ごろ、茎の途中から長い花柄を出し総状花序をつけ、花は淡紫紅色のものが多く白または淡黄色のものもあります。4枚の花弁には長さ2cmに及ぶ長い距(きょ：細く突き出した部分)があり、花は細い花茎の先に短い穂になって咲き下に垂れます。花茎は葉群の上に出るものと下になるものがあり個体差や地域差が見られます。イカリソウの仲間はいくつかの種があり、これらの茎と葉をインヨウカク(淫羊藿、別名：仙霊脾、*Epimedii Herba*)とよび精力剤として有名です。本来の淫羊藿は中国原産の同属のホザキイカリソウ *E. sagittatum*



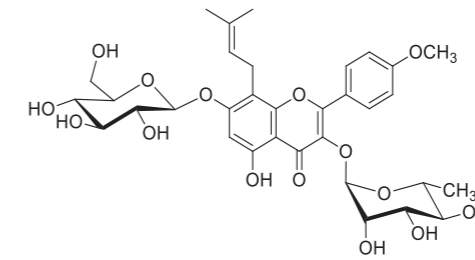
写真1 イカリソウ (花)



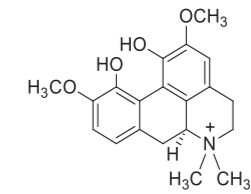
写真2 キバナイカリソウ (花)



写真3 バイカイカリソウ (花)



icariin



magnoflorine

図1 成分の構造式

で淫羊藿の名はヒツジがこれを食べて精力絶倫になったという伝説によります。また、ホザキイカリソウは別名を「三枝九葉草」といいますが、小さな花が穂状にたくさん咲き、花穂がたれ下らず、多数の小花をつけ外側のがく片は紫色、内側は白色、花弁は黄色で距はほとんどなく、日本には江戸時代に入ってきたそうです。漢方では補精、強壯薬とし陰痿などに用い、二仙湯などに配剤されます。イカリソウなどの成分としてはフラボノール配糖体の icariin (イカリイン) やアルカロイドの magnoflorine (マグノフロリン) が報告され、ホザキイカリソウの淫羊藿に対して、イカリソウを和淫羊藿とすることもあります。

日本に自生するイカリソウの仲間は5～6種類あり、イカリソウ(錨草) *E. grandiflorum* は本州太平洋側の落葉広葉樹の森の木陰などに自生し、花は淡紫、紫、白などです。トクワイカリソウ(常磐錨草) *E. sempervirens* は北陸から山陰にかけての特に雪の多い地域に分布し、葉は常緑、花は白、紅紫色です。キバナイカリソウ(黄花錨草) *E. koreanum* は北海道、北陸、東北の日本海側に自生、中国や朝鮮半島にも分布するイカリソウの変種と考えられ、淡い黄色の花を咲かせます。バイカイカリソウ(梅花錨草) *E. diphyllum* は本州の中国地方、四国、九州に自生し、花びらの先端がとがらず萼が花びらようになり、花は径1cmほどと小さく、形が梅の花に似ていて花は白です。イカリソウの仲間は、山野草として人気が高く、乱獲が危惧されます。